



TITLE:

大橋隆憲先生と統計学学問論

AUTHOR(S):

野村, 良樹

---

CITATION:

野村, 良樹. 大橋隆憲先生と統計学学問論. 経済論叢 1983, 131(6): 404-412

ISSUE DATE:

1983-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/133978>

RIGHT:

# 經濟論叢

第131卷 第6号

---

## 哀 辭

故大橋隆憲名誉教授遺影および略歴

## QCサークル活動と社会・技術システム論

- による責任ある自律的作業集団……………赤 岡 功 1
- 賃金上昇, 間接税および石油ショックの  
計量分析……………大 西 広 26
- 再生産と利潤率……………黒 木 龍 三 49
- 資本の国際化の方法的模索(下)……………奥 村 和 久 71

## 書 評

ナチ・レジームの社会史研究の一動向

——T. W. Mason, *Sozialpolitik im Dritten Reich. Arbeiterklasse  
und Volksgemeinschaft*, Opladen 1977 をめぐって——

……………後 藤 俊 明 95

## 追 憶 文

- 大橋隆憲先生と統計学学問論……………野 村 良 樹 110
- 大橋隆憲先生と社会階級構成論・  
障害者統計論……………野 澤 正 徳 119

---

昭和58年 6 月

京 都 大 学 經 済 学 會

## 大橋隆憲先生と統計学学問論

野 村 良 樹

大橋隆憲先生はもともと実証的学風に強く惹かれる気質の学者であったとわたしは思っている。前後40年間におよぶ先生の学問生活の前期と晩年の数年間を含む後期の業績およびその準備活動のなかに、著しくその傾向が強く感じられる。しかし中間期つまり1940年代半ばから60年代半ばの20年間ほどは、統計学学問論の構築に専念され、その所産は広くひとびとの注意をひきつけた。わたしが参加したその時期の刻苦勉勵ぶりを振り返ってみたいと思うのである。

1960年代の初めいわゆる安保条約改正をめぐる物情騒然とした世相がひとまず鎮静した頃、先生の研究室に沈思黙考の雰囲気が見られた。それはさきだつ十年余りの期間に吸収、消化したわが国をはじめ各国の統計学理論を整理し、みずからの知見を付け加えた学問論の研究モノグラフに完成のめどがついたことによるものであった。まもなくこの労作は『現代統計思想論』の標題をつけて1961年2月に有斐閣から出版されたが、先生はこれを契機にいよいよ自分自身の統計学説を積極的に提示する決心を固められたようである。

## I

その頃わたしはしばしば先生の研究室なり自宅に呼び出しを受けて、御自身のいわば大橋流統計学の、構想を聞かされた。それは問わず語り調のときもあれば、またときどき抱かれていた問題について関連文献や要約を求められることもあった。さきに述べたように、先生の文献渉猟にたいする好奇心は生涯を通じて変ることはなかった。この時期だけは、あまり文献を読まぬことにしよう、頭で考えよう、としばしば言われたが、むべなるかなである。加えて先生はひとが述べたり書いたりした意見にたいして即応できる器用人ではなかった。このようななかで統計学の体系を構築するという苦渋にみちた仕事が始まったのである。

この仕事はもうひとつの狙いをもっていたが、それは学生に対する教育に使えるテキストとしての性格をもたすことであった。後日の話してであるがこの狙いは決して成功したとは言えず、ひとびとの間で話題となるたびに先生とそれを手伝ったわたしは苦笑でまぎらすほかはなかったのである。

そのことはさておき、当時先生が考えられていた統計学の構想は、学問的遺産として継承した蜷川統計学の性格規定のなかで打ちだされた社会科学方法論説に立ちつつも、蜷川理論のはしばしに現われる非歴史的視角に基づく抽象性と形式主義、からいかに脱却し超克するか、が中心となっていた。蜷川統計学は上記の各操作を意識的に繰りこんだため、結果的に一家をなしたと考えられよう。まずその抽象性は統計集団「大量」であると「解析的集団」であるを問わず、対象の内容規定を極限まで捨象している点に現われている。次に形式主義とは「大量」と「解析的集団」との質的区別を絶対化して、それぞれに統計学の別途の内容を割りつけようとする考え方を典型としている。統計集団は必ず実体的基礎をもつ集団の表章であり、それはいまのわれわれの場合経済的統計集団である。また解析的集団は経済現象については経済史的過程と理解しなければならない。いささか荒い問題提起のしかたであるが、以上を基本命題として統計学体系を組み立ててみようという構想がまとまったのである。この考え方は蜷川統計学の継承者たちの間ですでに大なり小なり議論されてきたが、大橋先生は後日改めて次の言葉で整理された。「蜷川統計論の根本的欠陥は、その批判者たちが指摘するように、大量＝社会的集団の歴史法則的な認識が欠陥している、ということができる。蜷川理論においては大量は静態としてとられ、発展変化する社会経済構成体との関連の把握が弱い。時系列解析論において『時の要因』の規定における社会科学理論の無力さの主張となり、結局は時系列の非歴史的解析の弁護論（時系列の非時系列化）となっている」（『統計学総論』上、96ページ）。

この発想により、経済的現実を認識するために経済学が用いる固有の諸方法のなかで統計方法がいかなる役割を果たすかが探し求められ、現実の経済研究の過程の諸段階：(1) 歴史的過程＝社会的実践が提起する課題の確認、(2) 既成の理論・諸命題の検討と(再)構成の基準決定、(3) 事実資料の獲得・整理・利用、(4) 理論または命題の(新)構成、(5) 歴史的過程＝社会的実践による理論の検証・淘汰、の系統のなかで、それを(3)と(5)に位置づける考え方が提示された。

また社会構成体の基礎をなす経済過程の認識には、緊密な相互被制約性と不断の流動、変化、とを含む「社会的・集团的・過程」とみる視角が必須であるとされ、その時間的切片である経済集団に対する統計的アプローチは、必ず相互被制約性を示すための多標識的把握つまり統計指標体系を用いて、歴史経過のなかで生じたそれらの発生、変貌、消滅の認知操作が相伴なうべきであることが論述された。そして統計方法は、それが意図する把握対象の具体性により、感性的認識の多少とも整序された形態である統計的規則性の摘出をもって役割を終り、経済学の法則性には達しえないことが明らかにされた。

大橋先生のこのような意欲的構想が展開、論述されたものが、大橋隆憲、野村良樹共著『統計学総論』上、有信堂、1963年10月刊、の「序説 統計学の学問的位置」および「第1編 統計学基礎論」中の「第1章 統計理論の定式化と形式主義化」の内容である。大橋統計学の問題意識と解決をめざす苦闘のきっかけは、すでにそのまえに世に問われた名著書のなかで随所に現われているが、本著のなかでそれはピークに達したと考えてよい。

わたしが協力して作りあげた『統計学総論』は、以下「第2編 統計資料論総説」のなかで統計方法の具体的内容にはいるが、そこでは統計利用者の立場からみて圧倒的に多くの場合遭遇する「既存統計のみかた」(第4章)、利用のために統計資料をみずから獲得せざるをえないときに必要な手続となる「不足統計資料の作成方法——標本調査法」(第5章)と続き、その上巻を完結している。

いくつかの事情が重なり、不幸にも『統計学総論』(下巻)を書き上げる仕事は未完のままで終ってしまった。わたしと子ども先生の学問遍歴の刻印がこの箇所まで空白のまま残されている事実は、まさに痛恨のきわみである。しかし下巻の構想はある程度まで固まっていたし、部分的に下書きさえおこなわれていたのである。この機会を得て、わたしの手許にあるメモに基づき、不完全ながらその目次を再現してみることにする。

## II

### 『統計学総論』(下巻)の執筆順序にかんするメモ(1963年12月)

#### 第3編 統計資料分析法の体系化

##### I 統計利用による資料分析方法＝統計資料分析法の意義

## 1. 論理的分析和資料分析

## (i) 概念操作と資料（就中統計資料）操作

元の概念  $\xrightarrow{\text{概念操作}}$  新たな概念

a) 概念の発展の契機はなにか, b) 内生的発展と外生的発展

資料  $\xrightarrow{\quad}$  加工された資料  $\xrightarrow{\quad}$  概念  
            $\quad \quad \quad \downarrow \quad \quad \quad \downarrow$   
            $\quad \quad \quad \text{資料操作} \quad \quad \quad$

a) 「加工された」資料とはなにか, b) 加工された資料から概念に到達するまでの飛躍

分析対象と分析手段における抽象性と具象性

## (ii) いわゆるアナリシスのもつ意味

a) 複合体を要素へ, b) 具象物を抽象物へ, c) 現実から本質へ

## 2. 統計資料

## (i) 構造的（静態的）統計

a) 横断面分析の素材, b) 感性的「状態」の記述的認識, c) 構造的統計による構成関係の認識の妥当性について。構成的関係の全体的普遍, これは一般的普遍とは異なる

## (ii) 歴史的統計

a) 時系列分析の素材, b) 感性的「動向」認識, c) 歴史的統計による認識結果の妥当性について。構成的関係の全体的発展経過（過程）

(iii) 資料一般による判断はいかなる根拠によりなされるか。質的資料, 単なる量的資料, 統計資料, の各場合について

## II 静態的・構造的統計の分析方法——構造的諸関係の統計的表現法

## 1. 静態的・構造的統計系列と絶対的統計値

## (i) 質的統計系列と量的統計系列

## (ii) 場所的統計系列

## (iii) 絶対的統計値

a) 統計集団の単位要素の総数・部分数, b) 統計集団の調査標識の総量・部分量

## 2. 誘導統計値総説

(i)誘導統計値の区分

(ii)その必要(認識論的観点からする)

### 3. 静的統計比率

(i)構成比率

(ii)順序比率

a)地域間順序比率と地域指数, b)事物的順序比率と較差指数

(iii)対立比率

a)対立的概念間の直截の比率, b)対立的概念間の折衷の比率, c)非対立的概念間の関係比率

(iv)発生比率

(v)統計比率と平均値との関係。陰伏的(遊離)平均

### 4. 平均値

(i)計算的平均値

a)算術平均, b)幾何平均, c)調和平均, d)計算的平均値の一般形, e)平均値の前提になる(集団の)形式的同種性と実質的同種性。いわゆるグループ平均

(ii)位置の平均値

a)中央値, b)最頻値, c)その他

### 5. その他の誘導値

(i)分散と標準偏差。変異係数

(ii)歪度。尖度

### 6. 質的標識間または量的標識間の関係の強度

(i)連関関係の分析。連関係数

(ii)相関関係の分析。相関係数

a)単純相関, b)多重相関, c)部分相関

(iii)回帰関係の分析

## III 歴史的統計の分析方法——発展過程の統計的表現法

1. 静態の統計の時間的・断片的比較

2. 歴史的統計系列(時系列)。絶対的統計値の意味

(i)歴史的統計系列の内容

(ii)絶対的変動。階差

### 3. 誘導統計値総説

(i)誘導統計値の区分

(ii)歴史的統計における誘導統計値の（形式的・実質的）特徴

### 4. 動的統計比率

(i)増加率。成長率

(ii)寄与率

a)絶対的寄与率, b)相対的寄与率

### 5. 時系列の平均値

(i)時期的区分を伴う平均値＝社会的・歴史的時間についての平均値

(ii)機械的平均値

a)物理的時間における平均値, b)移動平均値

### 6. 時系列の変動分析法

(i)トレンド計算。最小二乗法

(ii)季節変動パターンの導出。季節変動調整

(iii)時系列の関係分析＝時系列の相関関係

(iv)時系列の分析における数理的方法の限界

### 7. 指数的分析法

(i)指数の定義と構成要件

a)基準：固定基準と連鎖基準, b)算式：平均の比率と比率の平均。総計の比率

(ii)指数的総合の方法

a)総合指数＝本来の意味での指数, b)ウェイトの問題, c)総合指数の基本型：それらの間の形式的関係, d)総和指数と加重平均指数

(iii)指数的要因分析法

a)複合的量と要因的量, b)要因の量の基本的種別：内包的要因量と外延的要因量, c)2要因の指数的分析法：(1)相互関連指数, (2)構成変化指数（標準化計算）, d)3要因以上の指数的分析法



## IV 統計的規則性

## 1. 歴史的統計における統計的規則性

## (i) 大数法則と統計的規則性

## a) 大数法則の定式化と適用条件, b) 統計的規則性の内容

## (ii) いわゆる統計的法則, 経験的法則, 社会科学的法則

## 2. 結論——社会科学的認識と統計利用

『統計学総論』の「第3編 統計資料分析法の体系化」のなかに盛りこまれるはずの内容は、専門の方々にはおおよそ想像のつくことがらであろうが、いま目次を読み返してみると、いくつかの分節で執筆の狙いがまだ定まっていなかったことに気付く。特に最後に挙げられた統計的規則性の章について、当時最も考えがまとまらなかった状況がほうふつと浮かんでくる。もっともその考え方はごく一般的にはあるが、先生により次のごとく述べられている。「史的認識手段としての統計方法の形態は、……歴史的統計資料の形態とくに統計指標体系の時系列によって規定されるが、そこでの基本的な問題は、大数法則を前提とする数理技術的处理ではなく、唯物弁証法と経済理論とを前提とする統計指標体系の選択（これは社会的・集団現象的・過程の問題たる側面に対応するものでなければならない）と、そのうえでの統計指標体系の時系列の数理技術的处理とである。重要なことは、統計方法の形態ではなく、統計方法の果す機能であり、感性的歴史的認識を理性的歴史的認識に高めることである」（『統計学総論』上、37ページ）。この場合、「統計指標体系の時系列の数理技術的处理」結果にどのような認識的価値を認めるべきか、については必ずしも明らかではない。恐らく大橋先生の学説全体からの帰結として、それは感性的認識の多少とも整序された状態をさす統計的規則性と呼ぶべき内容のものを指しているが、この統計的規則性の意義についてはなお模索が続けられていたことは確かである。

## III

『統計学総論』は、さきに述べたように4編の構成をもつことが予定されており、最後の編にあたる第4編を「統計利用論」と名づけることは当時すでに決っていた。その趣旨は、先生の持説である統計指標体系を用いた歴史的數量分析の範例を示そうとする

ことにほかならない。その頃よく聞かされたが「観念論ばかりやっていたもしかたがないからな」ほど先生の心境を言い当てている言葉は、他にみあたらないように思われる。

統計指標体系のいくつかの構想は、すでに『統計学総論』上のなかで表明されており、現代資本主義把握のための統計指標体系の代表例として、例えば、(1) 企業分析、(2) 産業分析、(3) 労働者階級の状態（の分析）、等のために考案された指標体系が提示されている。だがそこには利用できる既存統計調査の指示はなく、したがって具体的な数字により肉づけされぬまま荒々しい骨格が示されたに留まっている。しかし目標に向うタイム・スケジュールはもう変えようがなかった。それは、上記著書の執筆と並行して進められていた「日本の独占資本家層の実態」『経済評論』第12巻第7号、1963年7月、「現代日本の階級構成——その統計による研究のために」『経済論叢』第93巻第3号、1964年3月、の両論文をきっかけとして、日本の階級構成を示す指標体系を設定し、そのなかに具体的な数字をはめこむ仕事に着手されたからである。代表的な統計調査結果からだけでは意に叶う数字が求められぬ場合は、あらゆるでだてと自身の足で文字通り東奔西走、およぶ限りの資料に目が通された。その頃からわたしは先生を評して「ただひとりの一揆主義者」と面前で軽口をたたいたが、先生の性格が、生涯のどの時期を問わずまた問題のいかに問わず、いったん心で決すれば衆を頼まず立ち向う反骨精神によってかたちづくられていたことは、弟子たちにとり身のひきしめる思いのする実感である。

統計利用論にかんする編は、出版上の具体的な事情もあって、そう多くの統計指標体系を取りあげることはできなかったため、経済研究上の緊要性とマクロ的視点を失なわぬことを考えて、国勢調査資料、労働統計、その他若干の統計を用いた「日本の階級構成」と、国民所得年報を主に使う「日本の経済循環」とで例示することが決められた。生産関係と分配関係の表裏性を科学的に実証してみようというわけである。わたしはそれ以前多少の知識と論文の執筆経験をもっていたので、経済循環を示す指標体系を選ぶこととなった。このような踏み出しのあと、その仕事は『総論』のなかではついに結実しなかったとはいえ、先生の『日本の階級構成』（岩波新書、初版1971年）、をはじめそれぞれ後年の研究方向に決定的な影響を及ぼしたのである。

統計指標体系の代表例として階級構成と経済循環とが選ばれた動機として、先生が若い時代から終始持ち続けておられた、経済分析視角として欠かすことのできぬ二方向がそれだとする潜在意識が導きの糸となったことは、疑いないところである。先生自身の

主要な業績としてはついに現われることはなかったけれども、先生の歿後、遺品整理に出向いたわたしたちは、先生の書斎の奥深くにしまいこまれていた戦前戦後の各国の国民所得、国民経済バランスにかんする資料のひと包みを遂に発見した。恐らく時間が許せば先生はこの方向での研究を手掛けられたことであろうし、そうだとすればその後輩出した弟子たちの何人もがこの分野を専門としていることでもあり、今度は衆を具しての一揆の様相となったことであろう。